

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例）独逸<sup>ドイツ</sup>

「」：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）近頃一釜<sup>かま</sup>の

〔 〕：アクセント分解された欧文をかこむ

（例）裏にかくれた 「e`rotique」 であつた

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照してください

[http://aozora.gr.jp/accnt\\_separation.html](http://aozora.gr.jp/accnt_separation.html)

雉子日記

一

去年の暮にすこし本なんぞを買込みに二三日上京したが、すぐ元日にこちらに引つ返して来た。汽車がひどく混んで、私はスキイの

連中や、犬なんぞと一しよに貨物車に乗せられてきたが、嫌いなステイムの通っていないだけでも、少し寒くはあったが、この方がよっぽど気持が好いと思った。

すっかり雪に埋もれた軽井沢に着いた時分には、もう日もとっぷりと暮れて、山寄りの町の方には灯かげも乏しく、いかにも寥しい。そんななかに、ずっと東側の山ぶところに、一軒だけ、あかりのきららしている建物が見える。あいつだな、と思わず私は独り合点をして、それをなつかしそうに眺めやった。

ハウス・ゾンネンシャインと云う、いかめしい名の、独逸人の経営しているパンションが、近頃一釜の沢の方に出来て、そこは冬でも開いていると云うことを、夏のうちから耳にしていたが、私がそれを見たのはついこの間のこと、クリスマスを前に、二三日続いて、ひどい大雪があった。そう、このへんでも五〇糶位は積った。

そんな大雪がからりと晴れあがるや否や、鬱陶しく閉じこめられていた追分の宿から、私はたまらなくなつて飛び出して、膝まで入つてしまうような雪の中を、停車場まで歩いて、それから汽車に乗つて、軽井沢に来たが、ここでも軽便を待つのがもどかしく、勝手知った道なので、近道をしようとして野原を突切ったのはいいが、茅なんかの埋まっているところは体が半分位雪の中に入りそうになったり、いきなり道傍から雉子が飛び立ったりして、何度も立往生せざるを得なかった。やっと別荘のちらほらとある釜の沢の方に出たら、道もよくなり、いましてが通つたらしい自動車の轍さえ生まれましくついている。どこかの別荘に来た奴のだなと思ひながら、その轍を辿つていったら、やがて山にかかると、それが消え失せ、その代りに男女の足跡らしいのが入り乱れてついているので、更にそ

れを追って行くと、釘づけになった数軒の別荘の間から、私の前に突然、緑と赤とに塗られた雛型の<sup>ひながた</sup>ように美しい三階建のシャレエが見え出した。南おもては一面の硝子張りだが、それがおりからの日光を一ぱいに浴びながら内部の暖気のためにぼうっと曇り、その中から青々とした棕櫚の鉢植をさえ覗かせている。近づいて標札を見ると、「Haus Sonnenschein」とある。ふん、こいつだなと思つて、私はその家の前を何度も振り返りながら、素通りして、裏の山へ抜けようとしかけたが、頭上の大きな樅の木からときおりどつと音を立てて雪が崩れ落ちてくるのに目が開けられないほどなので、又、引つ返してきた。その時ふいに、クリスマスに來たいと言つてきた阿比留信にこんなところに泊まらせてやったら愉快がるだろうと気まぐれに思い立って、そのままずかずかと裏木戸から這入って、台所を覗いて見ると、ストオヴの側で白いエプロンをかけた日本人の若い娘が卓の上に水仙の花を惜しげもなく一ぱい散らかして、いくつかの花瓶にそれを活けていたが、私の意を伝えると、きのう主人夫婦も横浜から來たばかりで、何でも、もうクリスマスには大ぜいな客があるように申しておりましたけれども、……まあ、中へおはいりになってお待ち下さい、と人懐こそうに私の方をまじまじと見ながら、そう言い置いて、奥へ引つ込んでいった。私はもうそんなことはどうだっていいんだと云つたような、ぼうつとするような気持で、好い匂いのするストオヴに頬を赤くしながら、真白いエナメル塗りの台所の一角に片寄せられてある、男と女の長靴から、さかんに湯気が立ちのぼっているのを見入っていた。……

いま、私の暮している追分ときた日には、村中で商いをしているのは、村はずれの居酒屋みたいなのと、煙草や駄菓子なんか売っているのと、たった二軒。正月こっちへ来てから、無精を極め込んで、一度も髭をあたらずにいたが、或る日、ぶらりと軽井沢まで汽車に乗って理髪店に行った。軽井沢の町だって、いまは大抵の店は何処かへ店ごとそっくり荷送されでもしそうな具合に、すっかり四方から荷箱同様の板を釘づけにされている。唯二三軒、うす汚ない雑貨店みたいのが、いまでも店を開いているが、そんな店先にもクレエヴンやベル・メルの罐が店ざらしになっているのは、さすがに軽井沢らしい。郵便局の横町にある理髪店に飛び込んで髭をあたって貰う。南を向いた店先には一ぱい日がさし込んでいる上に、ストオヴを自棄に焚いているので、苦しいくらい熱い。この店は夏場は五つか六つ鏡が並べてあった筈だが、いまはたった二個、そうして他の鏡のあった場所は、何処かの別荘のお古らしい、バネの弛んでいそうなベッドが占領している。ここでこの親方は、客の来ない時は昼寝でもしているのだろう。私の向っている凸凹のある鏡には、筋向うの、やっぱり釘づけにされた、そして横文字の看板だけをその上にさらし出している、肉屋と、支那人の洋服屋が映っている。おや、何だか見覚えのある奴が通るぞ。なあんだ、テニス・コオトの番人か。やあ、こんどは自動車が通る。毛唐の奴らが脂づめになっていやあがる。ふふん、さてはハウス・ゾンネンシャインの連中だな。鏡の中に映らないが、自動車が何か引きずってゆく音がする、何だい？ と訊いたら、構ですよ、と親方は無雑作に答える。

それからいそいで理髪店を飛び出すと、きつとゴルフ場へでも行って櫛で遊ぶのだろうと思つて、そっちへ行つて見ようと、まだ雪の大ぶ残っている町の裏側の「水車の道」へはいつて聖パウロ・カトリック教会の前まで行きかけたけれど、道は悪し、なんだか面倒くさくなつて、その筋向うの裏口からホテルに飛び込んで、お茶を飲まして貰う。勿論、客なんか一人もいない。そこで軽便の出るまで、ホテルの娘と無駄口をききながら、ストオブに嚙じりついていた。

追分の宿に帰つたら、思いがけず田部重治さんが来ていられた。越後の湯沢とかへ兼常さんやなんかとスキイに行かれたお帰りだとか。皆と高崎で別れて、お一人だけわざわざこちらに寄られた由。

茶の間の大一火燧の上で、鳥鍋をつつきながら、誠ちゃん（宿の主人）も加わつてよもやまの話。田部さんは本当に追分が大好きらしい。ことにこんな風に一杯聞こし召されようものなら、誰に向つても、追分のいいことを繰返し繰返し語られる。僕なんぞはもういい加減耳に胼胝が出来てもよさそうな筈だが、一向聞き倦きもせず、にこにこしながら会槌を打っているのだから、これも不思議だ。

たかが浅間山の麓で、いくぶん徳川時代の古駅の俤をそのまま止めているというよりほかに何の変哲もない、こんな寥しい村が、一体何でそんなにいいのだろう？ と他の人が聞いていたら、思うかも知れない。

この間、辻村伊助の「スウイス日記」を読んでいたら、リルケがその晩年を送りながら「ドウイノ悲歌」を書いたシャトオ・ド・ミユゾオのある、ロオ又河のほとりの、ラロンという村なんぞは、汽

車で素通りしている。ああいう旅行者にとっては、取るに足りないような寒村が、かえって詩人にとっては仕事をよく実らせてくれるのかも知れないのである。

### 三

浅間山だけがすっかり雪雲に掩われ、その奥で一人で荒れているらしく、この山麓の村なんぞには、日が明るく射しながら、ちらちらと絶えず雪の舞っているようなことがある。そんな時なんぞ、どうかして不意にその雲の端が村の上にかかる、南に連なった山々のあたりにはくつきりと青空が見えながら、村全体が翳って、ひとしきり吹雪く。と思うと、すぐ又、ぱあと日があたってくる。ここでは、そんなような空合いの日がかなり多い。

田部さんがリュックを背負って帰って行かれた七日の夕方も、そんな雪催いだった。途中の落葉松林のはずれまでお見送りして、其処から一人で帰ってきたながら、私はこの村にこうして一人で気儘にいられるのを幸福に思わなければならぬのかな、と考えたが、それにはいささか、半信半疑だった。

それから二三日立ってから、去年の夏この村で知合いになった英夫君が、正月になったら送ってくれと云って頼んで置いた空気銃を東京からわざわざ持って来てくれた。

翌日、一日じゅう二人で空気銃をもって森の中を駆歩いた。森の中はまだ雪が相当深い。これは狐の、これは兎の、それからこれは雉子か山鳥かどっちかだ、と雪の上に印せられている色んな足跡を、この間教えられたばかりのをおぼつかなく思い出しながら、そんな

ことを言い合っている間にいきなり私達の行手から飛び立つ鳥どもの羽音に、空気銃を手にしていることなんぞちよつと思ひ出せない位に、びっくりしたりしている、即製の獵人たちの間抜けさ加減！

一日じゅうの獲物といったら、たった頬白おしろいが一羽。……

その翌日、英夫君は二時の汽車で帰るというので、昼飯を早目にすませてから、お別れに村の西のはずれの、分去わかされのところまでぶらっと散歩に行った。馬頭観音ばとうかんのんやなんかはまだ雪の中にしよんぼりとしている。二人でその傍に佇たたずんで、しばらく浅間山の方を眺めていと不意に思いがけなく私達の頭上を、一羽の青味を帯びた大きな鳥が翼を水平に拡げたまんま、すうと低目に飛び過ぎた。やあ、雉子だ、雉子だ、と私達が言い合う暇もないうちに、街道の向うの小さな松林の中に、突然よろめくようになって、その雉子は下りて行った。いそいで私達もその林の中へ躍り込んで見ると、もう飛ぶ力のなくなっているらしいその雉子は、難なく英夫君の手で生捕いけとりにされた。

何処も怪我はしていないようだが、大方鉄砲打ちに翼でもやられて、やっとここまで山の中から逃げて来たのかも知れない。雄だから、綺麗な尻尾しっぽをしていた。空気銃でも持ってきていたら、それで射とめたのだと宿に持ち帰って威張れようが、あいにく手ぶらなので、へんな恰好で、そのままそれをぶらさげて帰った。

英夫君に東京へお土産みやげにしたまえと勧めたが、帰るのはもう一日延ばして、こっちでそれを皆と一緒に食べて行きたいと云って聞かなかった。

雉子はまだ辛うじて生きている。それを不自然な殺し方はしたくないので、宿の老犬ジャックを連れて、裏の林へ行つて、その雉子

を放したら、昔獵犬だったジャックはその逃げようとする雉子を巧みに追い廻しながら、要領よく噛み殺し、羽だらけになった口に銜くわえたまま、それを私達のところへ持って来てくれた。

雉子は悪食あくじきだから、肉が臭いと聞いていたが、鍋にしてもそれほどいやな臭いはしなかった。が、なんだかすこし無気味で、あんまりうまいとも思わなかった。

「#改ページ」

## 続雉子日記

英夫君が帰京してから、こんどは私は一人で毎日のように空気銃を手にして、ジャックを連れては、殆ど二三日おきぐらいに降るのですます雪の深くなった森の中を愉快そうに歩きまわっていたが、少しその度が過ぎたと見え、とうとう十日ほど前から風邪かぜを引いて、いくじなく寝込んでいたらくである。枕もとはお義理のように横文字の本を堆うずたか高く積んであるが、見ているのは大抵例の「スイス日記」か、ベデカアのスイス案内書位なものである。

この前の日記に、私はリルケが晩年住まっていたシャトオ・ド・ミュゾオのある村をラロンと書いて澄ましていたが、実はラロンはリルケの墓のある村の名で、同じヴァレエ州の同じロオヌの川沿いながら、ミュゾオのあるのはそれより少し下流に位している、シエールという小さな町から更に上方へ入った、葡萄畑なんぞの真ん中らしい。そしてそのミュゾオもシャトオとはほんの名ばかり、むしろ



十三世紀頃に出来た小さな塔のようなものであるらしい。

一九二一年の秋のことである。それまでスウイス中を転々としながら、長い間中絶されている「ドウイノ悲歌」を再び続けるべく、そのために外界と遮絶しへつせつして、全く一人きりになっていられるような隠れ場所を捜しあぐねていたリルケは、遂に伊太利イタリアとの国境にもはや近いヴァレエ州にやって来て、その何処どこかプロヴァンスや、また西班牙スペインの或る物をさえ思わせるような一帯の風物を一目見るや、此こ処ここそ自分の求めている場所と信じて、その町の一つのシエルに暫く滞在し、附近を捜しまわったがそれも空むなしく、とうとうその町をも立ち去ろうとする間際になって、偶然或る飾窓に売物に出ている一つの塔の写真を認めた。それは彼の或る友人の寝台の上の壁に以前から掛っていた絵の中の古い館やかただった。そしてそれがミュゾオだったのである。それを彼はその同じ友人の世話によって漸く手に入れることが出来た。

\*

「恐ろしい山々の荒漠たる風物の中に全く孤立せる小さな館。……私はこれまでかかる孤独な存在、かかる沈黙との極度の親密を想像だに出来なかつた。親愛なるリルケよ、あなたは純粹時間の中に閉じ籠こもっているように私に思えた……」と、その頃一其処そこを訪れたポオル・ヴァレリイは書いている。

翌年の二月である。十年前の、一九一二年ドウイノにて着手せられ、一九一四年以来殆ど全く中絶していた「ドウイノ悲歌」は遂にそのシャトオ・ド・ミュゾオにおいて完成せられた。しかもそれは

僅か二三日で出来上ったのである。

それを書き上げた夜半、リルケはもうペンを握る力もない位に疲  
勞しながら、眠る前にその出版者キツペンベルクにその完成を知ら  
せてやった手紙には甚だ人の心を打つものがあるが、その一節に曰  
く、「……私は冷たい月光の中に出て行きました。そして小さなミ  
ュゾオを大きな獣のように愛撫してやりました……かかるものを私  
に授けてくれた、その古い壁を。それからまたあの破壊されたドウ  
イノをも。」（ドウイノは大戦中に伊太利軍のために破壊された。）

それから数日と立たない裡に引続いて又、その支流とも云うべき  
小さな作品が殆ど求めずして出来た。「オルフォイスに捧ぐるソネ  
ット」と呼ばれる五十余篇のソネットがそれである。

それまでもとかく健康のすぐれなかつたリルケは、その仕事の過  
勞のためにいよいよ健康を損ねてゆき、その後殆どそのミュゾオに  
居ついたまま、僅かな詩作と、二三の翻訳をしたくらいで、遂に一  
九二六年十二月の末に死んで行つた。死んだのは、しかし、その愛  
するミュゾオではなく、発病後一強いて移されたレマン湖畔のモン  
トルウの療養所である。

病名は壞血症というものだそうだが、その病気の直接の原因にな  
つたと云われる、いかにもリルケの最後らしい、美しい挿話を、私  
はつい最近読んだ。

\*

或る日、リルケはミュゾオを訪れることを予め約束してあつた一

人の婦人を待つていた。その婦人は約束の時間よりもやや遅れてや  
つて来たが、それを待つている間、リルケはその客に与えようと  
して、庭に出て薔薇を摘んだ。(ミュゾオの庭には、詩人が自分の手  
で百株ばかりの薔薇を植えていたのである。)その時その薔薇の棘  
が彼の手を傷つけた。そしてその何でもなかったような小さな傷が  
次第に悪化して行って、遂に壊血症の原因になったと云うのである。  
「つねに女性の偉大さと薔薇の美しさを説いていた詩人はかくし  
て一女性のために摘んだ薔薇の一つに刺されて死んで行ったのであ  
る。その最後がいかに痛ましくあったとは云え、それはリルケが  
かれ独自の死を死すべく選んだものであった、」とその話の筆者は云  
う。

そのミュゾオの館の庭には、いまでも詩人の手植の薔薇が咲いて  
いるそうである。私が他日スイスにも行けるような身の上になれ  
たら、何よりも先に、そのミュゾオの館と、それから詩人の墓のあ  
るラロンの村とを訪れることだろう。

が、それはいつのことやら……。私はそれよりか今は、本はとつ  
くに買い込んで置きながら、まだ手をつけていない、そしてリルケ  
自身も「長い、時としては骨の折れる読書」と云うその「ドウイノ  
悲歌」を何とかして克服せんことをこそ思うべきであろう。

「#改ページ」

ノオト

「雉子日記」のなかで、私は屢々ミュゾオの館のことを持ち出したが、それについて富士川英郎君から非常に興味のあるお手紙を頂戴した。「ミュゾオの館」というのは、御承知のようにリルケがその晩年を過した瑞西スウイスのヴァレエ州にある古い「Chateau」のことである。その見もしない「Chateau」のことなんぞを私はいろいろと知ったか振りをして書いて見たのであるが、富士川君の注意によって、二三此処に訂正して置きたいと思うのである。

先ず、その「Chateau du Muzot」の読み方である。私はそれを普通にシャトオ・ド・ミュゾオと発音していた。ところが富士川君の注意によると、リルケ自らが一九二一年七月二十五日にマイリ・フォン・トゥルン・ウント・タクジス・ホオエンロオエ夫人に宛てた手紙のなかにそれを Muzotte と発音してくれと書いてあるのだそうである。恐らくそれがその地方特有の呼び方なのであろう。勿論、Muzotte は富士川君も言われるように、仏蘭西式フランスにミュゾットと発音するのだらう。従って私の用いていた「ミュゾオの館」は「ミュゾットの館」と訂正されなければならない。

以上はその館のほんの名称のことだが、富士川君はその名称のことから更に、その前述の手紙の中でリルケがいろいろとその館の構造や由来について詳しく語っている由、まだその手紙を見ていない私に懇切に書いてきてくれたのである。それによって私はもう一つ訂正して置いた方がいと思う箇所を発見したが、私はその詩人の愛していた古い館をただ漠然と十三世紀頃のものとして書いていたが、その頃から残っているのはその建物の根幹だけで、それから何度も建て直され、現存している天井や家具の多くは十七世紀頃のものらしい。それからリルケがその館のさまざまな歴史を書いている

うちに、こんな話があるそうである。

十六世紀の初め頃に、その館に Isabelle de Chevron という娘が住まっていた。その娘は Jean de Montheys という男と結婚したが、それから一年立つか立たぬうちに、マリニヤンの戦いが起り、その夫はそれにはかなく戦死してしまった。若い寡婦かぶになったイザベルは再びミュゾットの館に引き取られた。やがてそのうちに彼女の前に二人の求婚者が現われた。そしてその二人は決闘して、お互いに刺し合って二人とも死んでしまった。その夫の戦死には耐えることの出来たイザベルも、それには耐え得ずして遂に発狂してしまったのであった。そして夜毎にマイエジュにある二人の求婚者の墓まで、薄い衣をまとったまま彼女はさまよって行くのだった。そして或る冬の夜、彼女はその墓場に息絶えていた……

リルケは死ぬとき遺言して、そのイザベル・ド・シュヴロンの眠りを妨げてはいけないから、ミュゾットの近くのその墓地には自分を葬らないようにして貰いたいと言ったといわれる。……リルケの墓のあるラロンが、もう殆どシンプロンにも近い位、ずっとロオヌの谷を遡さかのぼったところにあることは、私が前にも書いたとおりである。その墓の写真が、去年の「インゼルシッフ」のクリスマス号に載っていたそうだが、それもまだ私は見る機会を得ていないのである。

底本：「堀辰雄集 新潮日本文学16」 新潮社

1969（昭和44）年11月12日発行

1992（平成4）年5月20日16刷

入力：横尾、近藤

校正：松永正敏

2003年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。